

研究課題：口腔機能低下は高齢者の転倒リスクを高めるのか？

研究者名：長谷川陽子^{1, 2}、櫻本亜弓²、堀井宣秀²、澤田隆³、岸本裕充²、小野高裕¹、新村健⁴

所属：1. 新潟大学大学院医歯学総合研究科包括歯科補綴学分野

2. 兵庫医科大学歯科口腔外科学講座

3. 兵庫県歯科医師会

4. 兵庫医科大学内科学総合診療科

筋力の低下は、バランスや歩行などの日常生活動作能力の低下を招き、健康寿命が短縮するばかりか QOL が低下し、豊かな老後生活を過ごす妨げになることが知られている。なかでも、筋力低下により転倒し、要介護状態に陥る高齢者は多い。転倒の危険因子は、加齢に伴う反応時間の遅延、筋力低下、バランス低下、歩行機能の低下などが挙げられるが、口腔機能の影響も近年注目されている。口腔機能は四肢の筋力と関連しており、なかでも咬合支持の喪失は、身体機能の低下に関連しているとの報告が散見されるが、高齢者における身体機能と咬合との関連性を詳細に検討した報告が充分あるとはいえない。

本申請課題は、農村部在住の自立した高齢者を対象に行った調査結果より、口腔機能低下が高齢者における身体機能の低下、特に転倒リスクに及ぼす影響について検討を行った。

対象は、兵庫県丹波圏域に在住する自立した 65 歳以上の高齢者で、医科歯科合同の学術研究調査に参加した 674 名（男性 202 名、女性 472 名、72.8±5.9 歳）とした。厚生労働省が 2006 年に作成した基本チェックリストを使用し、対象者を健常/プレフレイル/フレイルの 3 群に分類した。また、身体既往および転倒の既往の有無により、対象者を 2 群に分けた。口腔機能について、オーラルフレイルに関連する 5 項目：①残存歯数、②咀嚼能力、③舌圧、④主観的咀嚼困難感、⑤主観的嚥下困難感、を調査した。

対象者のうち、55 名(全体の 8.2%)がフレイルであり、プレフレイルとフレイルを併せると全体の 39%が該当し、高齢者の割合が多かった。フレイル/プレフレイルと判定された場合は、オーラルフレイルに該当する項目が有意に多くなり、身体の虚弱化と口腔機能の虚弱化との関連性が示された。また、身体機能の低下および転倒の既往歴と咀嚼能力および嚥下困難感との間に有意な関連性を認め、転倒は、咀嚼能力の低下により 1.5 倍、嚥下困難感により 1.6 倍リスクが高まることが示された。

以上の結果より、農村部在住の自立した高齢者において、フレイルとオーラルフレイルとの間に関連を認め、摂食・嚥下機能の維持が転倒リスクを低下させる可能性が示唆された。